

スローガン 「一燈照隅 萬燈照国～気概溢れる人財による 魅力ある浦安アイデンティティの確立～」

【はじめに～セントルイスの^{ともしび}燈～】

今から約100年前、アメリカ・セントルイスの一人の青年が燈した火が、今や世界中に広がりました。その広がりには全世界で119の国と地域にまでおよびます。青年の名はヘンリー・ギッセンバイヤ・ジュニア、JCの創設者です。

20世紀初頭アメリカ第4の都市であったセントルイスは、同年にオリンピックと万博が開催されるなど、繁栄した都市でした。当時彼は、ハーキュレイニウム・ダンス・クラブという団体を主催していました。彼は団体の活動の中で「本当に住み良いまちをつくるのは文明だけではなく、そこには人々の心の拠り所となる文化が必要であり、それらを守れるのは市民の力である」と説き、それがJC運動の始まりとなりました。「アクティブ・シチズンシップ」（主体的・能動的市民参加）という考え方です。その思いを受け継ぎ、ここ浦安でも明るい豊かな浦安を創るべく、1981年8月2日、全国で690番目のLOMとして、浦安青年会議所が誕生しました。創立の年は第2期の埋め立てが終了し、浦安町から市に移行したまさに新しい時代の幕開けを予感させる年でした。

浦安は江戸川が東京湾に流れ込む所にできた三角州で、浦安最古の神社と呼ばれる猫実の豊受神社が1157年（保元2年）の創建と伝わることから、それ以前に集落が形成されていたと考えると800有余年の歴史のあるまちであると言えます。その歴史の大半は漁業を中心とした生活でした。かつては東京に隣接しながらも「陸の孤島」と呼ばれ、東京の葛西と行き来するには渡し船や山本周五郎の「青べか物語」の中にもよく出てくるポンポン蒸気船など船に頼る生活で、交通が著しく不便な所でした。そんな浦安に1940年、大きな転機がおとずれます。浦安橋の完成です。東京の錦糸町などと東京市営バスが開通、その後海面埋め立て事業が始まると、浦安はその姿を大きく変えていきました。1969年には地下鉄東西線の開通により交通手段が飛躍的に進歩、市域は4倍以上に広がり、京葉線の全面開通によって東京に近いベッドタウンとして急速に都市化が進みました。浦安青年会議所が創設された1981年の人口は約7万人、その人口も現在は約16万4,000人と35年で倍以上になりました。

漁業を中心として生活を営んでいた浦安はここ数十年で大きな変貌を遂げました。都市化が進み生活水準も格段に良くなりました。しかしながら「本当に住み良いまちをつくるのは文明だけではなく、そこには人々の心の拠り所となる文化が必要だ」とヘンリー・ギッセンバイヤ・ジュニアが説いたように、明るい豊かな社会を創造するためには市民の心

の拠り所となる「文化」が必要なのです。

【浦安“らしさ”の追及による、人を惹きつける文化（アイデンティティ）の創造】

浦安は都心からのアクセスの良さを背景に、成長を遂げてきました。長い間漁師町で陸の孤島だった浦安は今では“うらやま市”とまで呼ばれるようになっていきます。しかしながらここに来て周辺自治体でも新たな交通網が整備され、再開発が進み、居住先の選択肢が広がってきています。交通アクセスの良さやまちの環境だけでは今後の発展は望めない時代になったのです。地方には大都市圏に所属しておらず、ましてや交通アクセスの悪いまちが活力を取り戻している事例があります。そこにはまちの特性を活かした「文化」が存在しています。折しも国は地方創生を推し進め、地域の独自性がこれまで以上に求められています。

まちにおける「文化」とは、衣食住などの暮らしやライフスタイルであったり、風景、芸術、スポーツ、そのかたちは無形であったり有形であったりしますが、いずれにせよそのまちのアイデンティティであると言えます。このアイデンティティの確立こそが、まちをさらに発展させる原動力になります。

人々がある価値観を共有し、その輪が広がり、まちに誇りを持つことで、まちの価値はさらに高まります。地域資源を活かした特徴あるまちづくりを行うことで、まちは今よりも活気ある魅力的なまちに変わっていきます。それは地域経済をも潤し、まちを訪れる人々の興味を惹きたてることにもなるのです。世界中の人々が京都に惹かれるのは京都にしかない唯一無二の世界がそこにあるからではないでしょうか。

まちの価値が高まり、そこに集う人々が誇りをもって暮らしていくことは、将来、私たちの子どもたちにとっても「住みつづけたい」、「戻ってきたい」そう思えるまちになります。だからこそ浦安が将来も発展し続けるには浦安“らしさ”を追究した唯一無二の「文化」（アイデンティティ）の創造が必要なのです。

【みらいを担う主体的・能動的青少年の育成】

J Cの創設者であるヘンリー・ギッセンバイヤ・ジュニアは「本当に住み良いまちをつくるのは文明だけではなく、そこには人々の心の拠り所となる文化が必要だ」そして「それらを守れるのは市民の力である」と運動をスタートさせました。主体的・能動的市民参加（アクティブ・シチズンシップ）、J C運動の根幹となるこの考え方を広めていくことこそが、まさにJ C運動の本質だとも言えます。

振り返って見て現状はどうでしょうか。残念ながらこの考え方はまだまだ広まっているとは言えません。市民参加の最たるものである選挙を取ってみても投票率は低下傾向にあり、政治に対する意識の希薄化は顕著です。民主主義とは、主権者である民衆ひとりひとりが判断し、決定し、責任を負う、という政治システムです。だからこそ、その在り様は本来、高度化していかなければなりません。でなければまちは、国家は衰退していくから

です。真の民主主義とは判断に責任が伴います。だからこそただ単に投票率を向上させれば良いというものでもありません。責任を持って判断し決定するためには本質を知ることが必要です。その上で判断し決定することで、真に有効な選択が可能になります。その繰り返しこそが繁栄に繋がっていくのです。

私は昨年、公益社団法人日本青年会議所の憲法論議推進委員会に出向しました。その際に多くの学びを得ました。その時、あらためて自分が知らなかった世界がまだまだたくさんあると気づかされたのです。日本の建国は、今から2676年前の紀元前660年2月11日、初代、神武天皇が即位した日が始まりです。その日から今日に至るまでの長い悠久の歴史の上に、私たちのまちや生活は存在しています。歴史や伝統、精神性、そして現在我々を取り巻く環境、そうしたこと一つ一つを知ることが主体的・能動的市民参加の一步につながります。知ることで見えてくるものがあるのです。

折しも昨年選挙権が18歳に引き下げられて初めての国政選挙が行われます。みらいを担う青少年たちが判断をするときの一助となるよう、また自らが行動するときの基礎となるよう、歴史的な年に今一度、みらいを担う若者たちにこの国の素晴らしい歴史や伝統、精神性などに触れる場を提供して参ります。

【魅力ある個人がつくる魅力ある組織】

J Cが運動を展開し、市民を巻き込んでいくにはJ C自体が魅力ある組織でなければなりません。組織が魅力ある組織であるためには魅力ある個人の存在が不可欠です。すべての組織における最小単位は「個」です。だからこそメンバー個人の成長がなにより重要なのです。なんのためにJ Cが存在するのか、運動とはなんなのか、リーダーが持つべき資質とは、会議の進め方、議案の作成方法、プレゼンテーション能力、J Cの活動においては成長の機会が提供されています。今年度はそれらの機会の提供を通じてメンバーの成長を促して参ります。

J Cは20歳から40歳までの青年経済人で構成されています。40歳になると卒業しなければなりません。だからこそ組織を維持するためには、また力強く運動を展開していくためには常に新たな仲間を迎え入れなければなりません。どんなに我々が良い事業をしても、そしてどんなに知名度が上がろうとも、その組織を構成するメンバーに魅力がなければ人は惹きつけられず、ましてや同志になどなろうとは思わずもありません。明るい豊かな社会へ向けて永続的に運動を展開し続けるためにも、まずは我々が魅力あるJAYCEEにならなければならないのです。

【交流で育まれる真の友情とそして成長】

魅力ある組織には魅力ある個人が必要だと書きました。そのための自己修練の機会を提供していきますが、それだけでは十分であるとは言えません。同じ価値観を持った仲間が交流を重ねることによって信頼関係を構築し、互いに切磋琢磨していくことで、個人とし

でも組織としても輝き始めます。私自身、青年会議所に出逢った仲間との交流が、なにより自分自身の糧になっています。

ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨かれないように人も人でしか磨かれませんが、接する機会が多ければ多いほど磨かれるチャンスは増えていきます。接することによって、そして互いに切磋琢磨することによって新たな「出逢い」が生まれます。この出逢いとは人との出逢いだけでなく、新たな価値との出逢い、そして新たなフィールドとの出逢いです。それが自己の成長にも繋がっていきます。それはJC運動だけでなく、個人の仕事にも生きてきます。互いの交流によって磨かれたメンバーが増えれば増えるほど組織の質は向上し、繋がれば繋がるほど関係は強固になり、組織としての活動の可能性は無限に広がっていくのです。私たちの出逢いは偶然ではなく必然です。だからこそ大いに交流し、自分自身を、そして組織を高めていきましょう。

【イノベーションできる人財の育成】

私たちはJAYCEEである前に1人の青年経済人です。それぞれの所属する組織、団体の構成員です。私たちJAYCEEが地域においてリーダー的存在であろうとするならばJCで学んだことをしっかりと活かし、それぞれの組織、団体でもその力を発揮していかなければなりません。永続的に組織、団体の活動を継続していくためには、常に柔軟な発想や創造力で手掛けている製品やサービスをイノベーションしていかなければなりません。

一方、JCは明るい豊かな社会の実現のために運動を展開しています。明るい豊かな社会とはどんな社会でしょうか。現在、日本ではほとんどの人は衣食住が足りた状態であり、物質的には豊かであると言えます。そのような中で、昨今は心の時代といわれ、精神的な豊かさを求める時代へと変化してきています。人々が求める豊かさが時代によって変化するものであるのであれば、明るい豊かな社会の実現に向けた青年会議所の運動に終わりはありません。目指す目標が常に変化し続けるのですから、我々は先駆者として常にイノベーションを図っていかなければならないのです。

イノベーション (innovation) とは、ラテン語の “innovare” (新たに作る) = “in” (内部へ) + “novare” (変化させる) を語源としています。よく技術革新や経営革新などと言い換えられていますが、イノベーションはこれまでのモノや仕組みなどに対して、全く新しい技術や考え方を取り入れて、新たな価値を生み出し、社会的に大きな変化を起こすことを言います。仕事においてもJC運動においてもイノベーションできる人財の育成が必要なのです。イノベーションを起こす柔軟で創造的な発想を養っていこうではありませんか。

【一燈照隅 萬燈照国～】

一燈照隅 萬燈照国 (いっとうしょうぐう ばんとうしょうこく) とは比叡山延暦寺を

開いた伝教大師、最澄の言葉で、「最初は一隅を照らすような小さな燈火でも、その燈火が十、百、万となれば、国中をも明るく照らすことになる」という意味です。一世紀前の一人の青年の志が今や119の国と地域に広がっています。我々が燈すその火は最初は小さな燈火であったとしても、必ず次代に繋がる原動力となり得るのです。

陽明学者であり思想家の安岡正篤（やすおかまさひろ）は青年世代に、こう説いています。

一燈照隅 萬燈照国

一つの灯火を掲げて一隅を照らす

そうした誠心誠意の歩みを続けると、いつか必ず共鳴する人が現れてくる

一灯は二灯となり三灯となり、いつしか万灯となって国をほのかに照らすようになる

だからまず自分から始めなければいけない

そのためには自分自身が明りにならなければいけない

それは手燭を持つことではない

そんなものは吹き消されたらそれっきり真っ暗になってしまう

そうではなく、自分自身が発光体になるのだ

一人一人が自分の役割を懸命に果たすことが、組織全体にとって最も貴重であり、その歩みがやがて社会の変革に繋がっていくのです。だからこそまずは自らを磨き、そして力を結集してこのまちの先駆者になろうではないか

【むすびに】

浦安青年会議所は昨年、35周年を迎えました。次の周年に向けて新たな一歩を歩み出します。私たちのまち浦安も開発が一段落し、成熟期に入っています。まちも次のステージへと歩みを進めようとしています。あらためて組織を、そしてまちを見つめ直し、みらいを見据え行動していきます。

すべては知るところから始まります。知り、学び、体験し、私たちはアイデンティティを創りあげていきます。このアイデンティティの探究こそが誇りにつながっていきます。それは人も組織もまちも同じです。誇りを持った人が増えれば増えるほど組織もまちも輝いていきます。その連続性が明るい豊かな社会の創造なのです。

さあ、輝く浦安のみらいを描こう。一燈照隅 萬燈照国 気概溢れる人財による 魅力ある浦安アイデンティティの確立を目指して。

☆ 事業計画

- ・浦安“らしさ”の追及による、人を惹きつける文化（アイデンティティ）の創造

- ・「人と地域をつなぐ就業体験」事業開催による浦安アイデンティティの確立
- ・みらいを担う主体的・能動的青少年の育成
- ・魅力あるJAYCEEを育成する機会の提供
- ・20名以上の会員拡大
- ・真の友情とそして成長を促す積極的な交流事業・例会の開催
- ・OB親睦会の開催
- ・イノベーションできる人財の育成
- ・第28回わんぱく相撲浦安場所の開催
- ・ゆめクルン普及促進運動
- ・公益社団法人日本青年会議所への積極的な支援・協力
- ・各出向者への積極的な支援・協力